

第一章 グルメポータルサイトで出会った人

私はこの県の県庁所在地に来ていた。自分が住んでいる町からは車で三十分くらい、距離にして四十キロぐらいの所。永野さんから教えてもらったグルメポータルサイトで、一緒に店に行こうという書き込みがあり私から連絡してみた。そして待ち合わせ場所にしたのは道の駅の駐車場で、到着したらラインをもらう事になっている。

今日の服装は、クリーム色の半そでふんわりフェザーニット、チャコールブラウンのロングフレアスカート、ダークブラウンのパンプス、シルバーチェーンの先にパールが付いたイヤカフ、ライトグレーのハンドバッグ、と秋色の可愛い大人系でまとめている。もうすぐ二十代前半が終わる頃だけど、ちよつとだけ大人っぽい装いでやって来た。

ピコン！

私がドキドキしながらラインを開くと、到着しました。の文字。今しがた入って来た車がいたので多分それだと思っていたら、相手が車の特徴を教えてくれた。私は車を降り、そちらに行ってお辞儀をする。すると男の人が車を降りて来て私の方に近づいて来た。

「初めまして！ 返事くれた人ですよね？」

「そうです」

「待ちました？」

「いえ。そんなでもないです」

ドキドキする。それは目の前の彼が、スッキリした顔立ちの背の高いイケメンだったから。

「あ。じゃあ俺の車で行きましょう」

「はい」

到着した店は燻製の専門店だった。ソーセージや牡蠣や茹で卵の燻製などが出て来て、ピザやローストビーフサンドなども食べられる。話をしていうちに打ち解け、敬語を使わないようにしようという事になった。

「美味しいね」

「美味しい」

もちろん夫は夜勤の仕事に出ていて、帰ってくるのは明日の朝九時半か十時ぐらい。さすがに罪悪感はあるけど、もう息苦しい生活は耐えられなかった。そんな事を心の片隅で考えていると、目の前の彼が言う。

「こんなかわいい人が来るとは思わなかった」

「それは私のセリフかなあ」

気さくな人で恋人気分にはなってるけど、彼にはまだ伝えていない事がある。それは私が既婚者だと言う事。楽しく食べている時に、いよその質問が来た。

「莉緒（りお）さんて彼氏とかいるの？」

「それは…」

「いるんだ？」

「彼氏って言うか、実は私…結婚してるんだ」

「あ、そうなんだ！ 見えないね。学生ぐらいにしか見えない」

「そんなことないよ。でも…人妻なんて嫌だよね？」

「別に気にしない。今一緒にいて欲しいし、逆に莉緒さんは気にするの？」

「申し訳ないなって思う」

「誰に？」

「あなたに」

「旦那さんにじゃなくて？」

「旦那には特に」

「じゃあ気にしないでいいよ」

夫の事はちょっと気になっているけど、ほったらかしにされるのはもう嫌だった。それに、私が衝撃の告白をしたというのに、それからの彼も気さくで恋人のように接してくれた。優しさなのかはよくわからないけど、私は何も考えないことにした。

すると彼が聞いて来る。

「食べ終わったら帰る感じ？」

「あ、迷惑だったら帰るよ？」

「むしろ、こんな可愛い子といられるなんて、ぜんっぜん迷惑じゃないんだけど。ただ旦那さんが待ってるんじゃないかなって思ってたさ」

「旦那は夜の仕事で、帰ってくるのは明日だから。夜は全然大丈夫」

私はつい意味深な答えを返してしまった。すると彼がニツコリ笑って言う。

「じゃあ、まだ一緒に居れるね」

「うん」

彼の車に乗って横顔を見つめるけど、やっぱりカッコイイ。逆に私の方が気になって来た。

「あなたは彼女とかいないの？」

「いないよ。最近東京からUターンで帰って来たばかりだし」

「そうなんだ」

「そうそう。田舎の仕事は楽だし余裕だけど、出会いとかはマジでないね。だから気晴らしにサイトにクチコミしたんだ」

「わかる。田舎ってなにも無いよね」

「ないない」

「ねえ、莉緒さん」

「はい？」

「もつと知りたいな。莉緒さんの事」

「えっ…」

すると信号待ちで彼がキスをしてきた。私は抵抗することなくそれを受け入れ、うっとりしてしまう。

「朝まで、旦那さん帰ってこないんだよね？」

「うん」

「じゃ、俺と居てくれる？」

「うん」

「じゃ、行こっか」

「うん」

そうして彼の車が発進する。その後も彼は、まるで恋人のように接してくれた。その彼の自然な応対に緊張する事も無く、そのままロードサイドのラブホテルに入る。都会のラブホテルとは違って、中かなりの広さがあった。ベッドだけじゃなくテーブルやソファ、そして変わった形の椅子などがある。すぐに電話がかかって来て彼がそれを取る。

「あ、はい。宿泊で。はい」

そして受話器を置いた。宿泊という言葉を聞いただけで胸が高鳴る私、そして座るなりキスをしてくる彼。舌が入って来たけど、私はそれを自然に受け入れた。

わたし…浮気…しちゃう…。

背徳感やドキドキが混ざりあって、不安なのか期待なのか分からない心臓の高鳴りを覚える。

すると彼の手が、スツと私のスカートの裾から入って来る。真つすぐに私のおまんこに伸びて、パンティの上から押さえつけるようにまさぐられた。

「ああ…」

久しぶりに自分以外の手でおまんこを触られて、感動すら覚えてしまった。

…夫にもずっと触られてないなあ…。

まるで私の心を見透かしたように、彼はキスをしたまま探るようにおまんこをまさぐった。

気持ちいい…。

体が火照り声が漏れる。

「ん…」

彼は優しく私の服を脱がせ、首筋から乳首めがけて舌を這わせていく。

あ…きた…。

だが。その舌は乳首には到達せず、その周りをクルクルと舐めている。

「ああ…」

焦らしてくる彼に、体が反応して身悶えそうになった。

早く…早く舐めて…早く…。

じっくり焦らされ、ようやく乳首の上に舌が到達した。ぺちやぺちやと音をたてながら、彼は丹念に乳首を舐めてくれる。そわそわと鳥肌が立ちジワリと染み出してくる愛液を感じた。すると彼が優しく言う。

「ここ…熱くなってるね」

「うん…」

彼がスカートのホックを外してファスナーを下げる。するりとスカートを脱がせた所作からも、彼が女慣れしている事がわかった。今日はワザとパンストを履かずに素足で来たので、パンティ一枚しか彼の指とおまんこを隔てる物はなかった。

「凄く興奮してる？」

「うん、してる」

「パンティの上からでもクリトリスがはっきりわかるよ」

「そう？」

「だいぶ我慢してたんだね」

そう言つて彼は、優しくクリトリスをパンティの上から撫でてくれた。

「ああ…」

じわつと来る…。